

# 1809年結成、世界最古の弦楽四重奏団が

## 文化の家にてやってきました

長久手市文化の家 事業係 生田 創

弦楽四重奏というと、クラシックファンの中でも玄人好みのイメージがあります。

その難題に取り組むべく2011年より「カルテットの魅力は一生モノ!」というシリーズを始めました。50名くらいの部屋で1曲だけ聴く、というちよつと変わった企画です。少し心配していましたが、現在も毎回60〜70名ものお客様が熱心に集まる定番コンサートとなりました。

弦楽四重奏の魅力が少しずつ浸透してきた頃、かつて文化の家でリサイタルを行ったゲヴァントハウス管弦楽団及び同弦楽四重奏団(以下GSQ)のチェリストであるユルンヤーク・ティムさんが定年を迎える、というニュースが入ってきました。このオーケストラでは首席奏者がGSQのメンバーを務める伝統があり、その地位を40年務めたティムさんが楽団を退くということは、とても大きな出来事です。ぜひ長久手でGSQを紹介しなくては、と思ったことが企画のきっかけとなりました。

企画段階で、GSQへ2つ要望を伝えました。1つ目はキッズプログラム、2つ目は、本公演の演目にベートーヴェンを入れて欲しい、というものです。

キッズ・プログラムの目的は、「超一流

の音楽こそ子どもたちが接するべきだ」と思ったからです。それには大きな問題がありました。GSQはこれまで一度もキッズ・プログラムをやったことがないのです。メンバーは「子どもたちにいったい何の曲を聴いてもらえば良いのか?」と悩み出してしまいました。

続いて、ベートーヴェンの要望ですが、

実は来日プログラムにはなかった演目でした。マネジメント事務所に「なぜベートーヴェンなのか?」と聞かれました。最大の理由はGSQのコンサートが10年以上も東海地区で行われておらず、長く待たれていた公演であり、このタイミングだからこそ彼らの十八番をやってほしい、という思いからでした。担当者は言いました。「一応聞いてはみますが、全国ツアーの中で長久手だけ別プログラムというのは難しいですよ...」。おつしやるのとおり。それきり、返事がなく長い時間が過ぎ去りました。

半ば諦めかけていたある日、マネジメント側から「ベートーヴェンのラズモフスキー3番に決まりました!」と連絡がありました。実は、新しいヴィオラ奏者がなかなか決まらず、元奏者に戻ったことが判りました。ラズモフスキー3番といえば、ベ-



名演を披露したゲヴァントハウス四重奏団

ートーヴェンの脂が乗り切っていた時の「傑作の森」を代表する作品で、これ以上望むべくもない曲目です。続いてキッズプログラムの曲目も出てきました。「アイネ・クライネ」、「アメリカ」など名曲がずらりと並んでいました。これで、「全国唯一の長久手オリジナル・プログラム」が出来上がりました。キッズ・プログラム当日には330人の親子が集まりました。2005年の歴史で初めてのコンサートです!演奏は、本気モードである。なるほど、これがGSQのモットーである「真摯なることこそ、真の歓び」なのです。メンバーは、終演後の質問コーナーやサイン会に意気揚々と応えていました。楽屋でメンバーは「グッド・アイディア!」「ちよつど楽器を始めるくらいの年齢にこ

うしたコンサートを聴くのは有効だ」「ライブツイヒでもやってみようよ!」などなど興奮気味に話してくれました。彼らにとつても初めての刺激的な出来事になったようです。そして、本公演。ハイドンの「皇帝」、メンデルスゾーンの6番、そしてメインのラズモフスキー。なんと充実した王道プログラムでしょう!公演はもちろん大成功。一年近く経った今でも「あのベートーヴェンはすごかった!」と言われるほどの名演でした。

伝統を守るだけではなく、常に革新と共存していく姿勢こそ、GSQの本質と実感しました。終演後、メンバーにあいさつをした館長が、ティムさんから言われたそうです。

「成熟したお客様ですね」

この仕事をしていて、これほど嬉しい言葉はあるでしょうか。

そして、こちらのリクエストに100パーセント応えてくださったGSQの皆様により感謝いたします。



サイン会に長蛇の列ができたキッズプログラム